

## IT維新の到来

理事

室脇慶彦



私は、明治維新というのは、まことに奇跡的な出来事だったと思う。1868年に明治新政府が発足し、日本はようやく近代化の道を歩み始めたのであるが、それからわずか40年足らずで世界の列強の仲間入りを果たしたのだ。1905年の日本海海戦において、当時世界最強といわれたロシアのバルチック艦隊を、日本の連合艦隊が完膚なきまでに駆逐したことが、明治維新の成果の体現だと私には思われる。

実際、バルチック艦隊は全38隻中、沈没21隻、拿捕6隻、逃走9隻などといった状況でほぼ壊滅した。他方、連合艦隊はというと、全108隻中、被害は水雷艇3隻の沈没のみである。大艦隊同士の決戦としては、現在に至るまで史上稀にみる一方的勝利とされている。

なぜ、ここまでの大差が出たのか？ 私は、新技術とそれを支える人的スキルが、日露間の圧倒的な差を生んだと考える。

新技術としては、取り扱いにリスクはあるものの、伊集院信管と下瀬火薬が直接的な効果をもたらした。それまでの砲弾は、不発弾も多く、煙突などに当たっても穴を開けてそのまま海中に落下していた。ところが伊集院信管は、ロープに当たってもその場で破裂したほど鋭敏に反応した。さらに下瀬火薬は、現在のTNT火薬を上回る爆力で、高熱のため鉄の大砲すら燃え上がったといわれる。また、日本の通信技術の軍事適応は、当時、世界のトップレベルにあり、木村駿吉博士の開発した三六式無線通信機を各艦に設置して情報交換に活用し、戦況を有利にした。このように、諸外国から新技術を取り込み、日本人自らも積極的な技術開発を試みたことが大きかったのではないだろうか。逆に当時のロシアは、レガシーともいえる戦力に

あぐらをかいて、新技術への適応を怠った。

またスキル面では、当時の日本人の識字率が75%であり、日本兵は複雑な兵器の取り扱いを文書で理解できた。ところがロシア人の識字率は20%程度しかなく、兵士の過半は文字が読めず十分な技能を獲得できなかった。このように、明治維新の原動力には、江戸時代から続く日本人の教育水準の高さも基本にあると思う。

結果的に、こうした状況が、帝政ロシアを滅亡への道に進ませたのではないだろうか、私は思う。いわゆる小国が大国を飲み込むほどの革新をこそ、「維新」といえないだろうか？

私は、米国を中心として、ITによる維新が始まったように感じる。これまでの産業革命は、既存ビジネスの生産性の劇的な改善と提供商品の拡大が中心となってきたと考えられる。ところが今起きている変化は、たとえばUberのように、既存のタクシー会社を全く違ったビジネスモデルで駆逐しようとしている。AWSは、サーバー事業者の冠であるIBMを窮地に追いつめているように見える。またGoogleは、自動運転車への参入を開始している。つまり、さまざまな分野で小さな企業が、あるいは全く関係のなかった企業が、既存の企業のビジネスを破壊しつつあるように思える。

この根本の変化は、これらの企業は、伝統的な物（ハード）を提供するのではなく、ソフトを武器としたITサービス提供企業だということではないだろうか。Uberは、数億人の顧客、数千万人のドライバーを管理し、サンフランシスコから全世界に向けて24時間365日サービスを提供する巨大システムを持っている。テスラモーターズは、すべての車を1台ごとに管理し

ており、ソフトウェアのバージョン管理、車の各部品の監視、運転状況の把握などすべてシステムで管理している。Twitterも、1日5億件のツイートを、過去分も含めすべてデータとして保持しており、さまざまなマーケティング分析をする巨大なシステムを構築している。AWS、Googleについては言を要しないであろう。あのコテコテのハードウェア企業GE（ゼネラルエレクトリック）も、ソフトウェア企業に自己革新しようとしている。

ただ、テスラの自動運転中の誤動作による死亡事故のように、ソフトウェアの品質が人の命に直接関係することも今後増加すると思われる、ソフトウェアの品質保証の方法が問われることになると思う。

TPP14条の電子商取引においては、データとサーバーの設置などの域内自由化がうたわれ、ITサービスの自由競争化がグローバルで始まろうとしている。同時に、セキュリティの強化、プライバシーの確保もうたわれ、標準化を含めた規制の必要性も論じられている。

IT維新に対応するには、最初にも述べたように技術変化への人員の対応が重要である。さらに、新たな技術を積極的に採用し、自ら新たな技術への投資が必要になってくる。それと同時に、経営自体が新たな技術について、自ら理解をし、どう対応していくかを、真剣に考えていくことが求められる。日本が負けた第2次世界大戦で時代遅れとなった「戦艦」（レガシー）を作り続けたようにではなく、新たな「武器」を開発しなくてはならない。自分自身が単なるレガシーとならないように。（むろわきよしひこ）